

往生をねがうしるし 世をいとうしるし—親鸞聖人の教えと非戦非核の願いに聞く—」全戦没者追弔法会記念講演(2011.4.16東本願寺)

「戦争の世紀を超えて」

東京大学大学院教授 姜尚中さん

今回の津波あるいは原発をはじめとして、三月十一日のわずか一日で二万人を超える人々が行方不明になり、また死者になりました。恐らくその数は、今後もっと膨れ上がるのではないかとまで言われていることは事実です。その人たちも普通の生活を営み、普通の豊かき、普通の人々の家族の団槃を祈っていたはずだと思います。しかし現実には、一日にして人がこの世から亡くなる悲惨な状況が我々に降り掛かってきているのです。

考えてみますと、今回の行方不明者や亡くなられた人の数は、一九九八年から約十一年以上続いてきた、一年の日本の自殺者の数にかなり近いと思います。私たちはこの十年間、先進国の中でもOECD(経済協力開発機構)諸国の中でも高い自殺率を毎年不名誉な数として計上してまいりました。韓国は残念ながら日本以上に十万人当たりの自殺者が増えております。中国では日本や韓国よりも増えているかもしれませぬ。今、中国ではびこっている金権主

義、金に対する人々の欲求というものは、日本のバブル経済の中にあつた時代とほぼ同じかもしれません。日本だけでなく、このアジアの繁栄の時代において、私たちは「煩惱の闇」というものを忘れ、ただひたすら自らの欲望を達成するために、科学技術を大いに活用することが社会の進歩だと考えてまいりました。日本はその最先端に立ち、そして今度の原発事故において、もしかしたらそのような進歩が、私たちに最大の厄災をもたらすのではないかと気づくようになりました。

私たちは、今回の事態を迎えて変わらなければなりません。戦争もまた総力戦体制である限り、科学技術を支えることによって行われる戦略的物資と、それによる生産力の向上というものが、まさしく戦争の雌雄を決します。

満州事変を起こした石原莞爾は、「生産力の向上」を何度も何度も満州事変の計画書の中に述べております。「戦略的物資の確保」、いかにして日本の生産力を高めるか。戦車を作り、自動車を作り、そして様々な兵器を作り、大砲を作り、そのためにどの



ようにして外国にまで進出し、その地域の農業から地下資源から、人力から、それを戦争という一点に向けて動員し活用していくか。

あるいは、そのような考え方は戦争という目的から平和という目的に大転換したとしても、科学技術や社会の仕組みや、私たちが生活している基盤は、あまり変わっていないのかもしれませんが。そう考えていきますと、このアジア社会の中で子不ルギーの枯渇をめぐって醜い争いが将来起きないとも限りません。

私たちは、今の科学技術の大きな土台、根本を変えることはできません。しかしながら、私たちの欲望や生活の在り方や、私たちの身の丈に合わない生活の仕組みを変えることはできます。そうしなければ、いつの間にか戦争になってしまうような時代が、またもう一度来ないとも限りません。

「生かされている」という感覚を取り戻す

したがって、なおかつ今も危機的状況は続いておりますけれども、今回の多くの人々の犠牲の上に、私たちの現世ご利益的な幸福主義というものを変えていくことが必要です。なぜならば、なぜ私は助かり、なぜあの人々は亡くなったのか、なぜ今私

たちは、普通の人間として生活をしていたのにこのような神も仏もないような自然の猛威にさらされなければいけないのか、なぜ小さな子どもが意味もなく死んでいかなければいけないのか、これらの問いに、現世ご利益的な幸福主義は答えられないからです。

どんなに医学が発達したところで、細胞学的な見地から人間を構成している細胞が壊死する状態が死であるというようなご宣託を垂れられたとしても、肉親や子どもへの死の悲しみから脱却することはできません。肉親や愛する人の死の前に立った時、その人を慰める言葉は科学技術からは出てきません。出てくる言葉は、人間的な言葉であり、そして恐らくは、この浄土正宗であれば親鸞聖人のお言葉かもしれません。

私たちは、自死によって一年に三万数千人が死んでいくという事態に目を背けてまいりました。なぜそのような事態が起きるのか。人が意味もなく死ぬということに対して、我々はどのような言葉を紡ぎ出せばいいのか。人はどのようにして失望や落胆や虚無から立ち直ることができるのか。このような問いを前にしてあたかも冷笑するかのような皮肉な態度というものが、この現世ご利益的な幸福主義の中にはびこってまいりました。

恐らくはその中心に東京があったのかもされません。東京の、あの繁栄するような摩天楼のような世界の中で、この世の中に不幸はないし、この世の中に闇はなく、我々こそが日本の頂点にあり世界の頂点にある。今ある私たちのこの暮らしを、絶対守り抜く。このような考え方が、多くの人々のこのころを捉えていたのかもしれない。

私たちは今、「私たちが生かされている」という感覚を取り戻さなければいけないと思います。そういう点で、私たちの欲望を基礎に据えたような社会、欲望を達成するための最大限に効率的な社会の在り方を根底から問い直す必要があるのではないかとこのころ、私が二番目に最も言いたかったことでもあります。

そして第三番目に、恐らく今回の事態の中で、多くの人々が、十メートルの堤防であるならきつと津波は防げるのではないかと、二重、三重、四重、五重の防壁を施したこの原子力施設であるならば、たとえ事故が起きたとしても、それを未然に防げるのではないかと。そういうものを受け入れ、私たちは普通の生活を送ってきたと思います。

悪意があったわけではありません。しかし、私が今回被災地に行ってみじみと感じましたことは、原発を受け入れなかった、しかし、原発を受け入れた地域からわずか十キロ

メートルに満たないような地域に住んでいる人々が風評被害に遭い、交付金も与えられず、東京電力からも一切の言葉もなく、自分の生計が成り立たない。ハウレンソウを作り、ニラ栽培を行い、そして牛を育てて乳を搾り、丹精込めて作った物がすべて無に帰す。それに対する憤りというものは、私自身にもひしと伝わってまいりました。普通の生活をしながら、なぜこのような事態が起きるのかについて、その行き場のない怒りを私自身もひしひしと感じました。私たちの生活は、ある意味において、誰かの犠牲の上に成り立っているということを、今回ほどしみじみと実感したことはありません。

私たちは東北電力の恩恵を受けている。しかし、なぜ首都圏や東京の電力を賄うために、福島に東京電力の施設を作り、私たちは原発と共に歩んで来なければならなかったのか。それに対する憤り。更には「福島」という名前だけで、県外に行けば差別を受け、そして「避難する子どもたち」にゼッケンを着けるべきだ」というような心ない声を聞いた。びに福島の人々は泣いておりました。(つづく)

